

うです。

当社としては、こうした現状を踏まえ、自社内でマイコプラズマ診断を行う体制を作り上げることにいたしました。CO2 培養装置、実態顕微鏡などを緊急的に導入し家畜保健衛生所の指導もいただいて、3月下旬ころより実施できると考えています。

バルク乳などの定期的なモニタリングや原因菌の分離できないような乳房炎乳など疑われるものあるいは、導入牛などに関して、積極的に検査し、農場にマイコプラズマ性乳房炎が入り込まないよう、あるいはもし入り込んでもすばやく対応できるようにしたいと考えています。当社としては大きな投資となりますが、これによって皆さんの農場が、他地域で起きているような大きな被害を受けることのないようにしていきたいと考えています。NOSAI の診療所、個人開業診療所を通して、全国初になります。

2. 哺乳にかかわる調査結果 その2

2010 年 2 月の M 情報に哺乳量の調査結果を報告しました。この中で、粉体としては日量 500g から 1200g まで様々でした。この差が一日の見掛け上の可消化蛋白に基づく予測増体量 (ADP allowable Gain) で数倍から 5 倍の差がでていました。(図 1)

一方、エネルギー源としての脂肪給与量はどうなっているのか、図 2 に示しました。

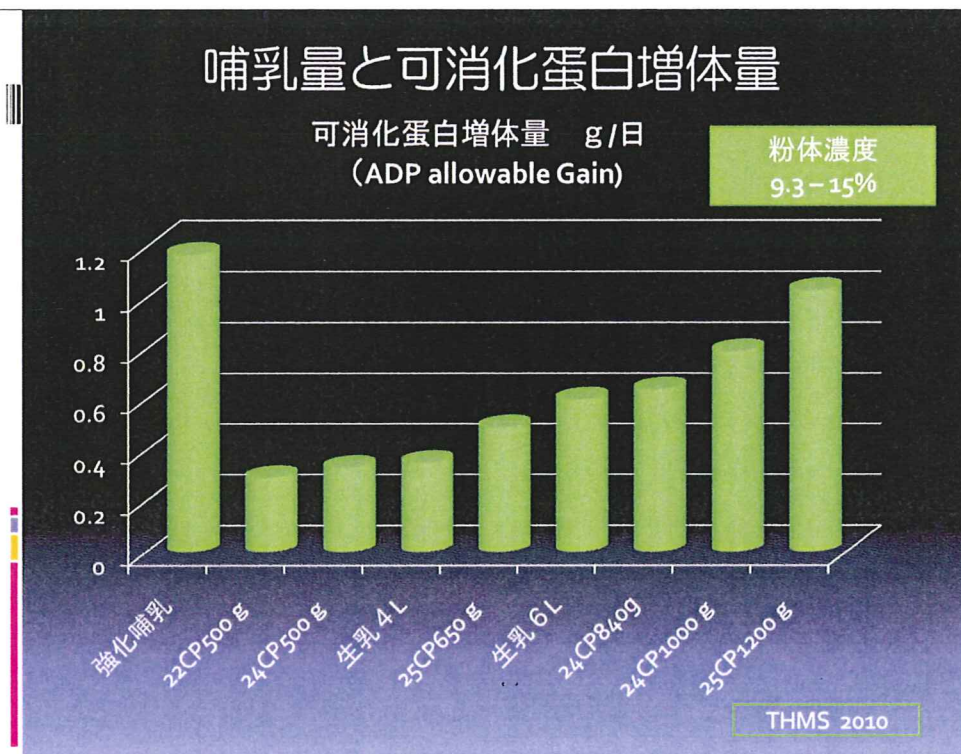


図 1

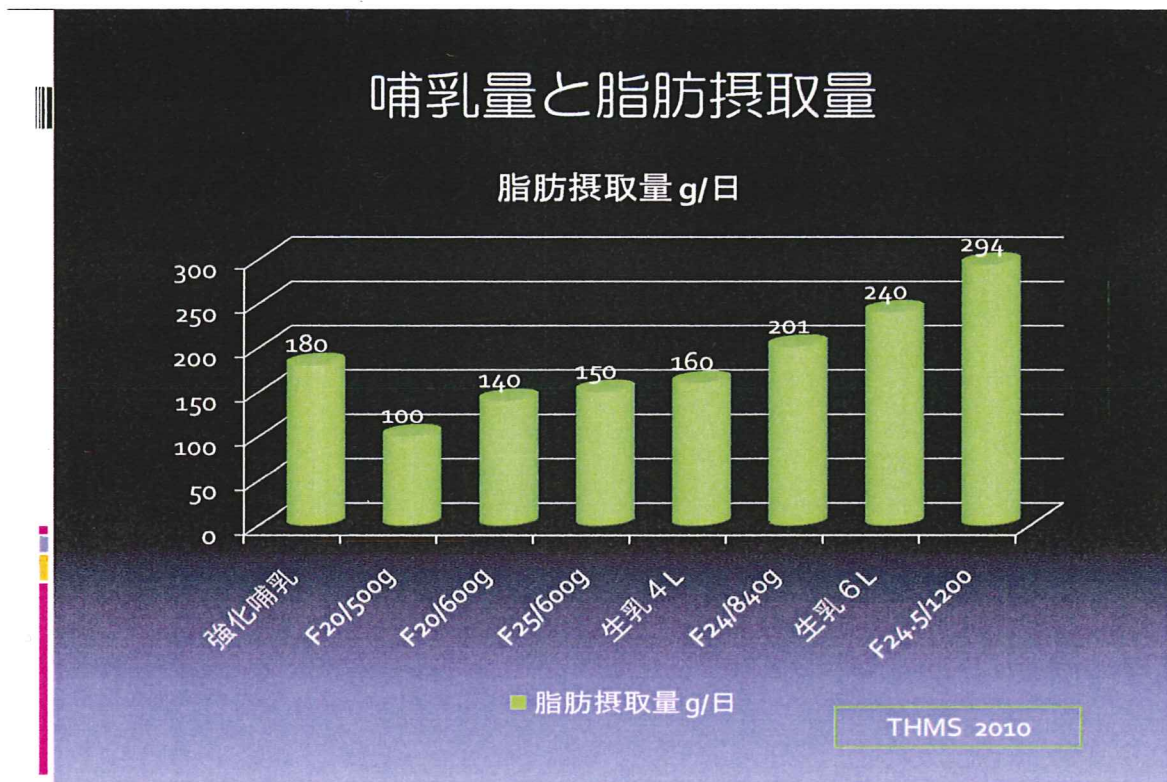


図 2

体本来の増体は、蛋白増体であるべきで脂肪増体はただ太るということですので、考え物ですね。ただし、当地のように厳冬期には蛋白だけでなく本来のエネルギー源としての脂肪もある程度必要になります。しかし、図 1 と図 2 から見ると、粉体として、CP24-25, FAT22-23 レベルのものを少なくとも 700-800g 程度は給与したいと思います。これらがちょうど生乳 6L/日レベルに近いと思います。あらためて、生乳の力が理解できます。生乳は栄養分だけでなく、その仔牛における消化性も優れています。ミルクの摂取量が少ない仔牛は、もうぜんとスターターを摂取しますが、スターターにはミルク由来の成分も入っていますが、穀類からのでんぷんや蛋白質あるいは脂肪を分解する消化酵素（アミラーゼ、プロテアーゼ、リパーゼなど）の活性は 3-4 週しなければ上昇してきません。一方ミルクに含まれる脂肪や炭水化物、蛋白などはごく僅かの消化酵素で分解できるようになっているのです。図 3 は、代用乳の乾物ベースでの、気温による維持エネルギー要求を粉体ベース（g 栄養分は CP20:F20 程度）であらわしています。これからすると、0℃を下回るとその必要量が 45 kg の仔牛でさえ 600g 必要ということになります。この根室においては、依然として 500g 程度の供与が普通にみられますが、冬に仔牛の病気が出やすかったり、それが長引きやすかったり、あるいは死んでしまうものが増える理由の一つにミルク摂取量の少なさがあるかもしれません。粉体を多く給与している農場や生乳を 6L ほど飲ませている農場での仔牛の健康度あるいは

は活性にたいする手ごたえは非常に良いように思えます。今一度、ミルクの給与量について考えてみてはいかがでしょうか？
次回はこれに関連して、生乳（廃棄乳の殺菌）について報告いたします。

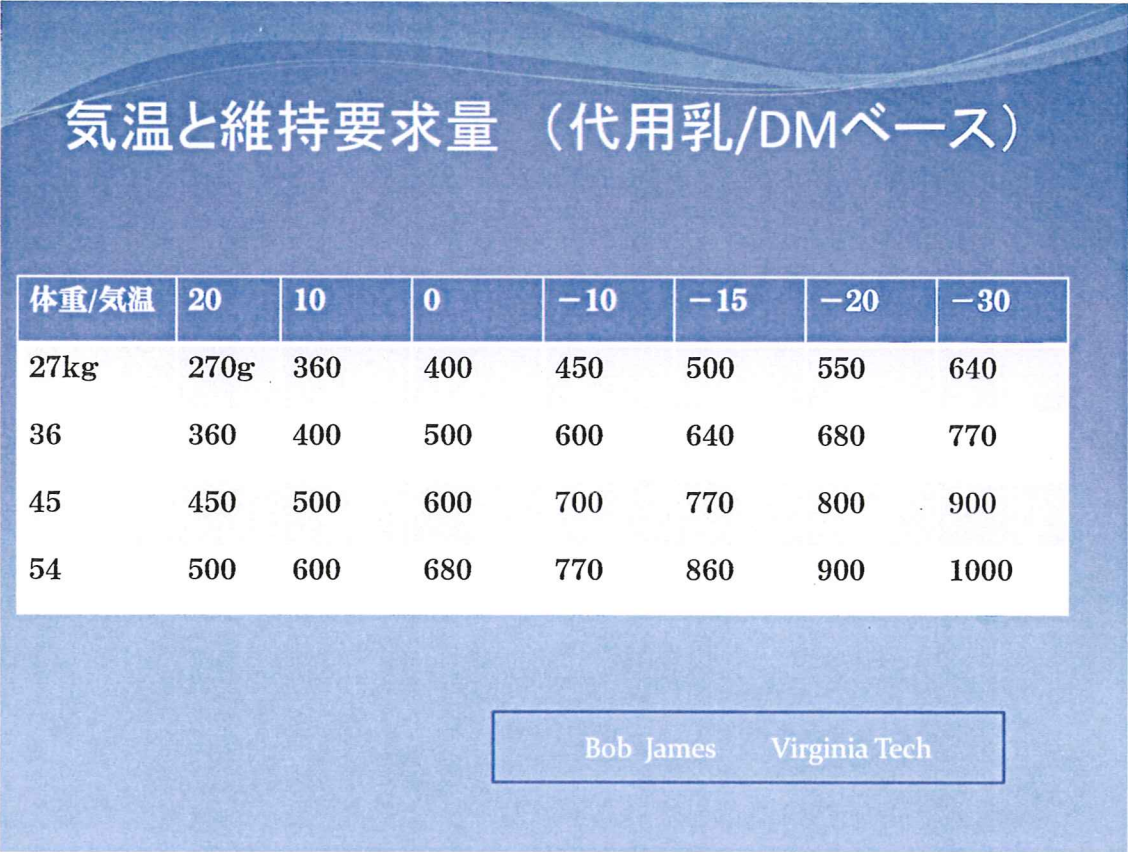


図 3

黒 崎